

長久手市では、住み慣れたまちでいつまでも自分らしい生活を続けていくことができるよう、地域包括ケアシステムの構築を目指しています。

その一環として、医療・介護・福祉等の専門職間で速やかに情報共有するための仕組みとして電子@連絡帳（「愛・ながくて夢ネット」）を運営しています。

平成28年10月20日、「愛・ながくて夢ネット」関係者約70名が集まり、交流会を開催しました。この交流会は、7月に引き続き2回目の開催となります。

その際の市長あいさつを紹介します。

市内で働き、助けてもらっていることを有難く思っています。そんな皆さんにだからこそ、お願いしたいことがあります。

今、盛んに「地域包括ケアシステム」と言われています。



「地域包括ケアシステム」とは重度な要介護状態となっても住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるよう、住まい・医療・介護・予防・生活支援が一体的に提供されるよう都道府県や市町村が、地域の自主性や主体性に基づき、地域の特性に応じて作り上げていくものではありませんが、「地域包括ケアシステム」で本当に求められていることは、医者は医療のことだけ、介護士は介護の仕事だけと、それぞれの立場の仕事だけをするのではなく、例えば、お医者さんが診察後、患者さんに対し、「ところで、何か困っていることはありませんか？話し相手はいる？」など、自分の立場の仕事を超えて困りごとに寄り添い、それらを地域で共有して地域で解決していくことだとも言われています。

昨年、市役所に「市民相談室」ができて、多くの相談が寄せられています。それは市役所にある「市民相談室」の場所まで来ることができる方からの相談が中心です。市役所は、家から出られず、困っている方たちの相談を直接伺うことは、なかなかできません。

一方でみなさんは、毎日、いろいろな人たちに直接会ってみえます。直接会って、「悩んでいる」「困っている」という話をたくさん聞いてみえると思います。まちの人たちが、どんなことに悩み、どんなことに困っているのか、私たちに教えていただけないでしょうか。例えば、みなさんに同行させてもらい、在宅で介護を受けてみえる方の話を聞くこともできたらと思っています。

そうした仕組みを作っていくには、まずは、今日のように集い、職種や事業所を超えて、互いの顔が見える関係をつくることです。

今日は、趣旨に賛同して大勢の人が集まっていたいただき、ありがとうございます。

～交流会に参加して～

交流会は、各事業所からの実行委員会メンバーの方々が中心となって、同じ事業所で固まることなく、参加した人同士が知り合えるよう、様々な工夫を凝らした内容で行われ、笑いが絶えませんでした。そんなみなさんが、長久手市内で働いてくださっていることを非常に心強く、有難く思いました。みなさんにも、一度でも直接会ったり、食事をしたりすれば、その後、親しく話せるようになった経験があると思います。今回、顔を突き合わせて交流する大切さを改めて実感しました。